

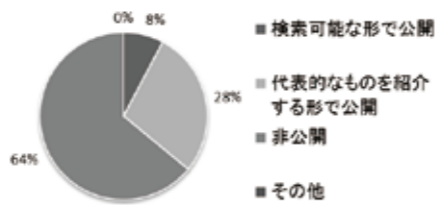


博物館資料は、インターネットで検索できないのが当たり前？

ミュージアムメディア研究所では、平成27年3月に「資料データ管理状況等に関する調査」を実施。17の設問を全国の3,908の館(機関)に送付し、1,052館からの回答をいただきました。

「資料のデータについて、インターネットで公開していますか?」という設問に対し、「検索可能な形で公開している」と回答したのは、わずか80館。ほとんどの館が、ホームページで資料を検索できない状態であることがわかりました。また、3割近くの館が代表的な資料を紹介しているとは回答していますが、インターネット上に流通する情報量や、表紙で紹介した公共施設に関する意識調査の結果などを考えると、十分とはいえないものがあります。

このアンケートでは、ミュージアムの現状が浮き彫りになりました。MMLジャーナルでは、今後もアンケート結果に基づく分析と考察をお届けしていきたいと考えております。なお、詳細なデータをご覧になりたい場合は、弊社までご一報ください。



情報のつながりが持つポテンシャルを引き出しあう社会づくりを目指して

東京・早稲田に放生寺という高野山真言宗のお寺があります。昔の職場のすぐ近くなので、とても懐かしい思いで足をのびしました。ここで毎年体育の日に開かれる放生会(ほうじょうえ)という行事についてご存知でしょうか。放生寺のホームページには、次のように解説されています。

「放生とは捕らえられた魚介、鳥、動物などを殺生をしないで池、川、山林に放す法事」「その起源は古くインドにおいては釈迦在世の時代から行われていたと伝えられ、我が国においては養老四年(720)宇佐八幡宮で行われた放生会が日本最初と言われております。」

有名な歌川広重の「名所江戸百景 深川万年橋」(1)も、実はこの行事に関連するもので、放たれようとしている亀を描いているそうです。敬虔な仏教徒の国・タイでは、同様の行事が現在も続けられているとか。浮世絵で日本とタイがつながっているようで、不思議な気持ちになります。

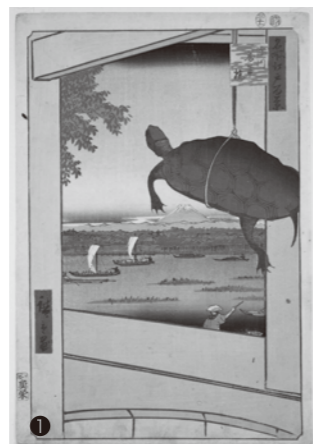
同じ東南アジアのバングラデシュでは、「リキシャ」と呼ばれる三輪自転車があり、福岡アジア美術館には実物が展示されています(2)。名前からも察することができます通り、これは日本の人力車がルーツとか。装飾がまるで違いますが、仕組みは似ているようです。

この煌びやかな装飾、どこかで見たことがあるな…と記憶を辿ったら、バングラデシュとタイの間、ミャンマーの伝統楽器「サイン・ワイン」(3)でした。写真は、以前、浜松市楽器博物館で撮影させていただいたものです。いかがでしょう、テイストが似ていませんか?

日本とタイ、日本とバングラデシュ、バングラデシュとミャンマー。並べてみると、文化は繋がっているものなのだ、と感じずにはいられません。普段は縁のない「よその国」にも、親しみが湧いてきますよね。これからの国際理解の下地には、こういう「歴史や文化の接点の認識」が必要なのかもしれません。

今回は、個人的な記憶を繋ぎ合わせてみましたが、今後はスマートフォンで知を共有できる時代になるのでしょうか。その可能性を感じさせてくれるのが、「文化資源のLinked Open Data化」なのでしょう。数年後にはより具体的な仕様を描けるように、弊社も研究と発信を続けてまいります。

株式会社ミュージアムメディア研究所
代表取締役 内田剛史



1「名所江戸百景 深川万年橋」歌川広重 1857年
2 サイド・アハメッド・ホセイン(絵)、アリ・メカール(車体製作)「リキシャ」1994年
3「サイン・ワイン」浜松市楽器博物館所蔵

MML Journal Vol.1

2015年5月31日発行

編集・発行:
株式会社ミュージアムメディア研究所
東京都新宿区新宿5丁目3番15号

株式会社 ミュージアムメディア研究所
Museum Media Labo.



MML JOURNAL

Vol.1 2015.05



「財政難なら、ミュージアムはなくてもいいと思う」調査で明らかになった厳しい市民感情

「厳しい自治体の財政状況の中、あなたが『今後も公共施設として優先的に残すべき』と思う施設はどれですか?」という設問に対して、「美術館・博物館」を挙げた人は4人に1人、「郷土歴史館」を挙げた人は7人に1人しかいなかった…。図書館については過半数の人が「優先的に残すべき」と答える中で、ミュージアムは「自治体の財政が厳しいのなら閉館してもかまわない」と考える人が大半を占めるという調査結果が、博物館関係者に衝撃を与えている。

今年2月、日本政策投資銀行が「公共施設に関する住民意識調査(平成26年度版)」を発表した。まちづくりの観点から、老朽化が進む公共施設をどうすべきかという問いについて、インターネット上で行ったアンケート調査の結果がまとめられている。

「厳しい自治体の財政状況の中、あなたが『今後も公共施設として優先的に残すべき』と思う施設はどれですか?」という設問で、美術館・博物館と回答した人は24.8%、郷土歴史館は14.1%に留まったという。つまり、大半の人が「なくなってもやむを得ない」と思う施設ということになる。

「削減可能性都市」など、財政が逼迫する地方自治体が多い中で、「優先順位づけ」は今後さらに苛烈になっていくと思われる。とすれば、「なくてもよい」と思われている施設の将来が明るいはずがない。もしも住民意識だけが自治体の意思決定の要素だったなら、数多くのミュージアムが閉館の憂き目に遭うことは避けられない情勢となっていたのだ。

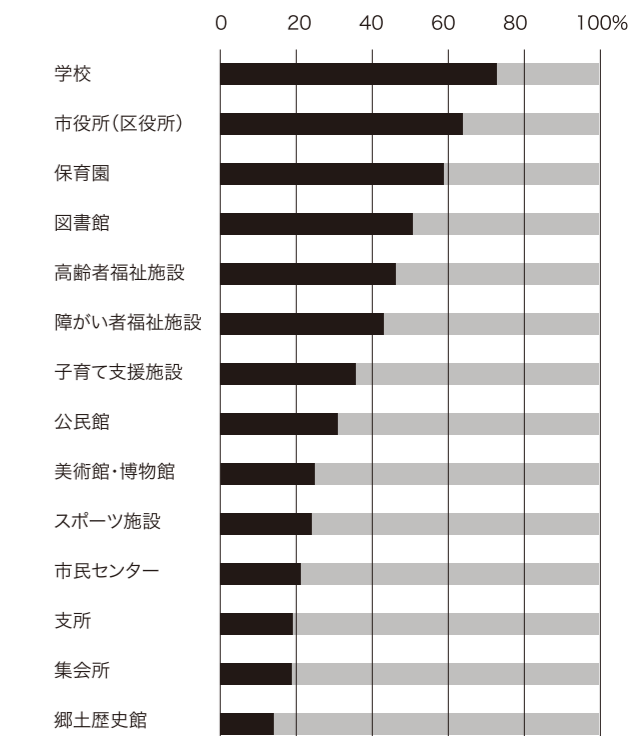
「厳しい自治体の財政状況」と設問にわざわざ枕を付け、さらに「優先的に」と言われると、身近なもの、生活に直結するものが有利

になるのは必然。ミュージアムは最初から不利だったと言える調査だが、仮に質問方法を変えたとしても劇的に結果が変わるとは考えにくい。やはり、深刻に捉えるべきだろう。

ミュージアムだけでなく、即効的な効果を見出しにくいもの、たとえば企業のスポーツチームなど

も多数が廃止になってきた。長い目で見れば効果を上げているはずでも、それを周知しなければ、先の見通しは暗いという結論が導かれざるを得ない。

重要なのは、人々が貢献を実感できるように館運営と言えよう。まずは、逆風の中にあることの自覚の徹底から始めたい。



対象=株式会社マクロミルの登録モニター n=3,110
日本政策投資銀行「公共施設に関する住民意識調査(平成26年度版)」より



ヨコハマ・アート・LOD 第1回 ～芸術文化情報基盤の実現に向けて～

特定非営利活動法人リンクトオープンデータイニシアチブの小林巖生氏による、LODのミュージアムへの活用とその将来性についての、最新の事例を踏まえた解説と考察です。

▶ 中面へ



ヨコハマ・アート・LOD 第1回

～芸術文化情報基盤の実現に向けて～

情報アーキテクトの視点から

いま、本稿をお読みになっているみなさんの中には、「ヨコハマ・アート・LODプロジェクト」をご存じの方もいらっしゃるかもしれない。ヨコハマ・アート・LODプロジェクトは筆者がプロデュースを担当し、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団とともに進めている横浜の芸術文化に関する情報をLOD化しようというプロジェクトだ。

本稿では、このヨコハマ・アート・LODを紹介させていただく。LODとはLinked Open Dataの略で、文字通り、リンクされたオープンデータのことを指すのだが、詳しい説明に入る前に、まず、オープンデータについても簡単に説明しておく必要があるだろう。

筆者は普段、情報アーキテクトとして地域情報化を主なフィールドとして仕事をしている。地域で活動するあらゆる主体によるウェブサイトやウェブシステム、最近だとアプリなども含めた情報発信や情報交換スキームの企画、提案、設計、構築までのプロデュースを行っている。もう少し簡単に言ってしまうと、企業、NPO、ボランティア団体、行政、個人のそれぞれ情報活動を効率的かつ効果的に行うための工夫をするのが筆者の仕事ということになる。

地域では、あらゆる主体によって常に情報活動が営まれている。具体的には、情報の収集、交換、発信などになるが、その過程には多くの非効率が含まれる。

とくに、組織を越えたデータの共有には課題が多い。たとえば、地域の子育て支援NPOが保育施設の情報をウェブサイトやスマホアプリを通じて提供しようとした場合、当然、保育施設のデータベースが必要となる。通常、こうした場合、役所に問い合わせでデータを入手するか、自ら収集するかして独自にデータベースを構築する必要がある。

しかし、このやり方では、同テーマで活動するNPOが複数あれば、同じ手間をかけて同じ内容のデータベースを複数つくるといった事態が発生する。ようするに、地域社会の中で同じようなデータベースが複数造られる非効率が発生するわけだ。

根本を考えれば、保育施設のデータは自治体によって管理されており、そのデータがオープンデータとして一般に開放されれば、どのNPOもそのデータを参照することでこうした無駄は解消されることになる。2015年現在であれば、自治体によるオープンデータへの取り組みもいくらか進捗がみられ、保育施設に限らず多様なデータが入手できるようになってきているが、筆者がヨコハマ・

アート・LODをはじめた2009年当時はオープンデータは、一般にはまったく知られていない考え方であった。

オープンデータとは？

オープンデータとはオープンライセンスのもと、ウェブ上に公開された機械判読式のデータのことを指す。機械判読式というのは、ようするにプログラムなどで利用するために簡単にデータを取り出すことができる、いわゆる「コピペ」がしやすいデータということだ。

EUでは、2003年の公共セクター情報の再利用指令の中でパブリックセクターインフォメーション(PSI)に対する原則オープンデータが宣言された。さらに、2013年には博物館、美術館、図書館、アーカイブといった文化機関に対しても、原則オープンデータが義務づけられることとなる。

また、アメリカでは、2009年にバラク・オバマ大統領が掲げたオープンガバメントというコンセプトが注目を浴びた。簡単に言えば、政府の透明性を向上させ、政策決定プロセスに市民参加を促し、マルチステークホルダーによる協働で課題解決にあたるというものだが、その、3つの柱を担保するものとしてオープンデータを推進している。

一方、日本はどうだろうか。2013年のG8サミットで提案されたオープンデータ憲章には、各国首脳とともに安倍晋三首相もサインしている。また、世界最先端IT国家創造宣言が閣議決定されており、その中でも「オープンデータを推進する」としており、近年、その動きは政府機関から自治体への広がりを見せている。

続いて、本稿のテーマである文化芸術分野でのオープンデータに関する取り組みを簡単に紹介しておこう。

このジャンルにおいてのフラッグシップは、なんといっても「ユーロピアーナ」だろう。ユーロピアーナはヨーロッパ連合によるプロジェクトで、3000を超える欧州各国の文化機関が参加し、4000万点を越える作品の画像データや目録データが統合されている。

画像データはオープンライセンスでないものも含まれるが、目録データについては原則オープンデータが義務づけられている。ユーロピアーナのウェブサイトにある検索窓に、たとえば「Vincent van Gogh」(ゴッホ)というキーワードを入力すれば、欧州各国、各文化機関が所蔵するゴッホの作品や関連する文献などを一覧することができる。

各国各館の目録データを横断して検索できるだけでなく素晴らしい成果だが、さらに興味深いのは、そうしたデータがさまざまな用途に応用可能であ

るところだ。ひとつ例をあげてみよう。Van Go Yourself (<http://vangoyourself.com>)というサイトをご存じだろうか。同サイトは、世界の名画のバロディ作品が集まるギャラリーサイトで、それぞれの作品はユーザーによって自撮り(自分で自分達を撮るといこと、海外ではセルフイーと言われている)され、サイトに投稿されたものだ。

ユーザーは、ユーロピアーナの中からモチーフ画像を選んで、その構図、人物の風貌などを真似て写真を撮影する。投稿された作品はオリジナルの名画と並べられて表示されるので、比べて楽しむことができるわけだ。

こうした、思いもよらぬかたちでデータが応用されることが、オープンデータの本質的な価値だ。他にも、アムステルダム国立美術館、スミソニアン、ブリティッシュミュージアムなど特徴的な取り組みがあるのだが、詳しく紹介するのは、またの機会に譲ることとする。

LODの技術

さて、話題をLODに戻そう。冒頭でも触れたが、LODとはLinked Open Dataの略で、その名のとおり、リンクされたオープンデータということになる。この項ではLODの技術の触りの部分を駆け足で紹介したいと思う。技術に馴染みの無い方には少し難しい内容となるかもしれないので、その場合は読み飛ばしていただいてもかまわない。

LODでは、あらゆる事物にその属性を叙述していくことで表現し、ウェブ上で参照できるリソースとして公開、関係のあるリソースをリンクして行くこととなる。抽象的な説明ではわかりづらいと思うので、少し具体的に見てみよう。

例として、実際にヨコハマ・アート・LODで公開されているデータの中から、横浜美術館が所蔵しているイサム・ノグチの1989年の彫刻作品「真夜中の太陽」のデータを見てみる。この「真夜中の太陽」をLODで表現してみると、図1ようになる。

「<http://collection.yokohama.art.museum/items/show/20428>」

このURI(Unique Resource Identifierの略、グローバルなウェブ空間での識別子として利用される。URLはURIの一種でウェブサイト/ウェブページの識別子)が、この作品のウェブ上での識別子となる。このURIについて、いくつかの属性が記述されており、名称が「真夜中の太陽」であること、作品タイプは「彫刻」であること、作者は「イサム・ノグチ」であることなどがわかる。

特定非営利活動法人 リンクト・オープン・データ・イニシアティブ

副理事長 小林 巖生

ここで注目していただきたいのが、所蔵館をあらわす「yav:currentLocationAt」記述されている箇所だ。よく見ると、次のURIで示されているのかわかるだろう。

「http://yan.yafjp.org/place-info/place_46」

ここでURIが示されていることが、まさにリンクなのである。このURIは横浜美術館のもののだが、リンクを辿ることで、さらにその先に連なる横浜美術館の住所や電話番号などの属性情報を取得することができるというわけだ。このように、LODが広がれば理論的にはウェブを巨大なデータベースのように扱うことが可能となる。

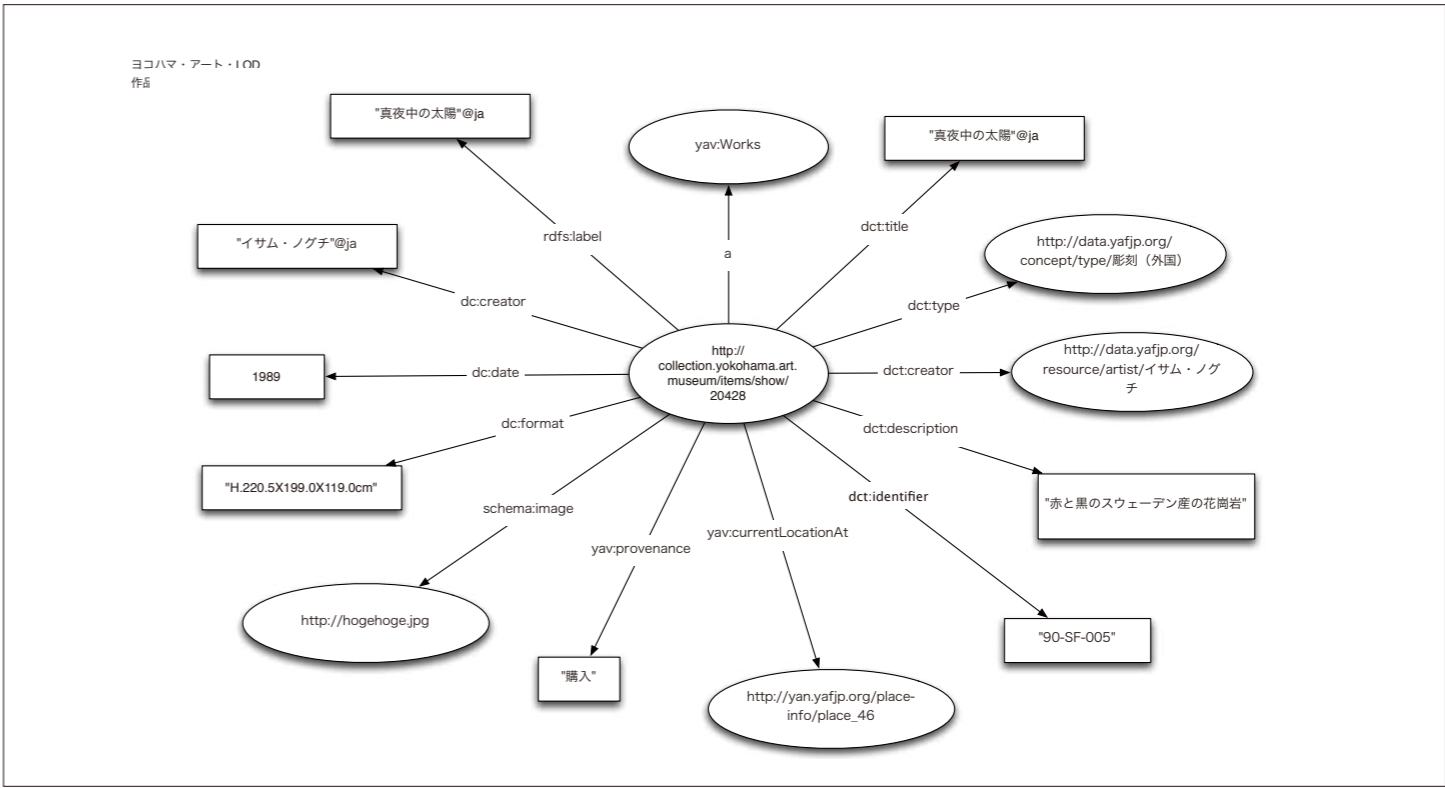
ここまでは、図をもとに説明をしてきたが、実際のデータはどのように記述されているだろうか。ここでは例として同じく真夜中の太陽のデータを一部抜粋して紹介しよう(例1)。このデータは、先ほどと同じ真夜中の太陽のURIから取得できる。詳しいデータの取得方法はヨコハマ・アート・LODのドキュメントを参考にさせていただきたい。

(<http://data.yafjp.org/reference.html>)

例をご覧くださいと、作品名や発表年といった属性情報がシンプルな形で列挙してあることがおわかりかと思う。このような構造のデータであればプログラム処理するのもしやすい。

* * * * *

| | |
|------|---|
| 【例1】 | <pre> http://collection.yokohama.art.museum/items/show/20428 a yav:Works; rdfs:label "真夜中の太陽"@ja; dc:title "真夜中の太陽"@ja; dct:creator <http://collection.yokohama.art.museum/items/show/24938>; dc:creator "ノグチ,イサム"@ja; dct:issued "1989"^^xsd:date; dc:format "H.220.5X199.0X119.0cm"; dct:description "赤と黒のスウェーデン産の花崗岩"@ja; dct:type <http://data.yafjp.org/concept/type/彫刻(外国)>; dct:identifier "90-SF-005"; yav:provenance "購入"; yav:currentLocationAt <http://yan.yafjp.org/place-info/place_46> . </pre> |
|------|---|



LODを深く知るための参考書籍
「Linked Data : Webをグローバルなデータ空間にする仕組み」
<http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I024201703-00>